

CL 寓話 —似たもの三代—

ベバリーの息子ピーターは摂食障害で、常にお腹をすかしていた。その上ピーターの身体は、ベバリーが作る食事を片っ端から摂ったが、決して満腹にならなかったのも太りもしなかった。朝から晩までベバリーは息子のために料理し、次々と食事を出すのに忙しかった。

若者の中には、思春期を過ぎると自然にこの障害を克服する者がいるが、ピーターもそうだという保証はない。年々母親は、疲労がつのってきた。自分の時間をつくるのに、息子の食事にはインスタント食品を使うのが多くなってきた。

自由な時間が二・三時間もあると彼女は台所から飛び出して、両親の所に行くのだった。最初は、息子がどんなに重荷になっているかということについて愚痴をこぼした。しかし不満は何も解決はしない。その上彼女自身が、空腹を感じた。年が経つにつれて彼女は、台所のテーブルで母親の作る食物を食べて過ごすようになった。

「ピーターの食事の準備で忙しすぎて、自分が食事をする時間がないの。母さんが準備してくれる食事がとても必要なよ」と涙を一杯ためて母親に語るのだった。

「もう私には話しかけないで」と母親は不平を言った。「玄関から入るなり、冷蔵庫に直行なんだから。正直言って、もううんざりだわ。あなたはもう大人でしょう？ 私には、他にすることがあるのよ」。ベバリーが帰るや否や、母親は夫の部屋に駆け込んで、娘が変わってしまったと泣き叫ぶのだった。


「このところ泣いてばかりいるね」と夫は注意した。彼はあまりにも気が滅入ったので、心理療法師の治療を受け始めた。しかし、この療法師はひどい太り過ぎだった。事態はかくの如しである。

▼コメント

要求が要求を生み、その要求がまた次の要求を生むというように、無限に繰り返される。必要が必要を生むということについても同じである。奪うことなく与えることを、誰が出来るだろうか？ とはいえ、与えることなく奪う人は、どんなに多くいることだろうか？

David K.Reynolds 著 本多岩夫訳

“Water Bears No Scars :“Pushaway”p142

 [目次へ戻る](#)